

---

# 真夏の日課

上月

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

真夏の日課

### 【Nコード】

N3207D

### 【作者名】

上月

### 【あらすじ】

はいつきに坂を下った。ごおごおと耳の奥で風の音が鳴る。真夏の風を全身に浴びて、あまりの風圧にどこか遠くへ吹き飛ばされるんじゃないかと思った。

夏は短し 恋せよ男子

――真夏の日課

じりじりと太陽に焼かれた、コンクリートの坂を自転車ですつきに駆け上った。額から汗が噴き出て、Tシャツがべつとりと背中に張り付いている。時折背中を押すように、後ろから吹いてくる風が、すうつと体の熱を奪ってくれる。それがまた心地よい。

通称心臓破りの坂として、地元の人々に親しまれているこの坂を、ぼくは毎日登っては下りる。元来体の弱いぼくのことといえ、大抵は読書か、幼少の頃から習っていたピアノを弾くことくらい。野球やサッカーなどのスポーツに特別憧れを抱いているわけでもない。ぼくにとっては、たった一冊の本の中に広がる世界に入ることだけで満足だった。けれど、やはり夏休みに入ればいくら本を読んでもピアノを弾いても、時間は空くもので、暇を持て余したぼくは、ちよつどつい最近、心臓破りの坂を越えて少し行ったところにある大きな県立の図書館の存在を知ったのだ。怠けた体を動かすついでに、足を運んでみようと思ひ起こし、そして今に至る。

「あつちい」

シャツを引っ張って顔の汗を拭くと、坂のてっぺんまできて、一旦自転車を止めた。生い茂る木々から、蝉がひっきりなしに鳴いているのが聴こえてくる。それはもう、耳が痛いくらいに。

今年の夏は、平年よりもうんと暑かった。夏の初めは少し外に出ただけでも、肌が焼けて赤くなり、ヒリヒリと痛んだのだが、さすがに毎日図書館に通っていると、肌もそれに適応して、段々と小麦

色になり、どこことなく自分が男前になったような気がして、この前鏡を見て、少し自惚れたくらいだった。

「よし、行くか」

一通り休憩したところで、ペダルに足を掛けると、今度はいつきに坂を下った。ごおごおと耳の奥で風の音が鳴る。真夏の風を全身に浴びて、あまりの風圧にどこか遠くへ吹き飛ばされるんじゃないかと思った。

坂は段々緩くなっていき、ぼくはようやくブレーキに手をかけてゆっくりと減速していく。次第に風もやわらかくなり、町を上から見下ろしていたぼくの視界は、今度は町に見下ろされたみたいに、低くなっていた。坂を越えてしまえば、あとはもう一直線で、いつ見ても誰もいない、古ぼけた交番を過ぎればあっという間に図書館に着く。ぼくが住んでる町の隣町というだけなのに、人々はもちろん、雰囲気もどこか違っていて、この夏が終わるまでに、ぼくもこの隣町に解け合えたらいいのに、と思っている自分がいることについて最近気がついて、少し驚きもしたが、本の中だけではない自分の世界がちよっと広がった気もして、嬉しかったりもした。

自動ドアが、難聴者用に流れるアナウンスと共に開く。一步館内へと踏み込めば、あたたかな雰囲気と涼しい風に包まれた空間が広がる。本を黙々と読み続ける人々から一言も話し声が聴こえなくても、なんとなく、同じ気持ち共有しているような感覚がして、この図書館に来るたびに、わくわくした不思議な気持ちになる。

昨日は文学本を読んだから、今日はファンタジーにしようか、などと考えながら、棚の壁面に掲示された、ジャンルの書かれたボードを歩きながら見ていく。

「あ」

ふと、目を前に向けると、つい最近、ここで知り合ったばかりの古川こがわさんの姿を見つけて、思わず小さく声を上げた。その声に気がついたように、古川さんもぼくの方を向くと、一瞬だけ目を丸くし

てから、すぐにやわらかく微笑んだ。

「今日も来たんですね」

ひっそり声で話す彼女の唇が、小さな顔と同様、上品に整っていることに気がつく。声も至極落ち着いてる。制服の胸元にある、ネームプレートに載っている顔写真よりも、実物は何倍も可愛らしいように思える。

「ぼくら、毎日会ってますよね」

小さく笑って、ぼくも古川さんに微笑み返すと、お互い何がおかしいわけでもなく、くすくすと笑い合った。

「今日も、お手伝いですか？」

古川さんの着ている、深緑の少し古いデザインの図書館の制服を見て、ぼくは訊いた。彼女は軽くうなずいてから、「もっと割りのいいお給料くれたらいいんですけどねえ」と笑った。

図書館で働いている母親に、人手が足りないからといわれて、彼女は渋々、この夏限定で、アルバイトをしているらしい。元々ぼくと同じように、本が好きで性分であったため、あまり仕事の内容にも抵抗がなく、次第にこのアルバイトが楽しくなってきた、という話を以前彼女から聞いた。

古川さんと別れて、ぼくは「海外のよみもの」とボードに書かれた棚の方へ向かう。邦書と違って、洋書は分厚いものが多い。特にファンタジーは、ハリー・ポッターのように、一巻が上下二冊に分かれているものも多く、今日一日で読めそうな本を探すのに一苦労した。それでもやはり図書館は、ぼくの部屋にある本棚と違って、ジャンルも色々あれば、目を引くような本も山ほどあり、どれを読むかでまた一苦労した。

そうしてようやく手に取った本は、真っ白な猫がバケツに入っている姿が描かれた表紙の、少し薄い小説。背の低い椅子に腰をおろして足を組み、一番リラックスできる体勢になってからようやくページ目をめくった。

館内で閉館のアナウンスが流れ、ぼくははっと顔を上げた。いつ

の間にか、本に没頭しすぎて時間を忘れてしまっていたらしい。ふと辺りを見回してみると、来たときよりも館内はがらんとしていて、ぼつりぼつりと人がいるくらい。近くの窓から外を覗いてみると、空は橙色に染まり、もう陽が落ちようとしていた。

ぼくは本を閉じて、元にあつた場所に戻すと、両腕を伸ばして大きく伸びをしてから、長い間同じ位置に傾けていたせいでかたくなった首をひねる。はあ、と深く息を吐いてから、そろそろ帰ろうかと図書館の出入り口に向かって足を運ぶ。途中でぼつたりと古川さんにまた出くわし、二言三言、話をしてから、図書館を出て自転車を留めておいた駐輪所に向かう。

「あのっ！ 城谷くん！」

不意にぼくの名前が呼ばれ、声が出た方向を見ると、さっきさよなら、と言葉を交わした古川さんがぼくの方に向かって走ってきていた。ぎよつとして、「どうしたんですか」と、ぼくの傍で息を切らしている古川さんの背中をなでると、「これ、渡しそびれちゃって」と苦笑しながら、一冊の本を手渡された。

「城谷くん、前話したときに月が好きだって言ってたから。わたし、もうこれ読み飽きちゃったし、城谷くんなら読んでくれるかなあつて思ったんですよ」

ほんの少しの距離を走っただけなのに、頬を赤くして息を乱している彼女の姿はとても愛らしくて、ぼくはあまりのおかしさに笑いながら、本をぺらぺらとめくって、適当に目を通してから、「ありがとうございます」と本を胸に抱えて礼を言った。

「あ、じゃあ、これで」

全てをやりおえたといった表情で彼女は微笑むと、少し気まずそうにはにかみながら、ぺこぺこと頭を下げて、今度は図書館の方へと走り去ってしまった。あまりにも台風のように来ては行ってしまった彼女の小さな背中を見て、何かあたたかなものが体を流れる感覚がした。

ぼくは自転車のカゴに本を入れると、全速力で自転車をこいで、

足が重たくなっても気にせず、坂を全力で越えて、そのままいつきに今度は坂を下った。古川さんにもらった本が、カゴの中ではばらばらと様々なページを開いていた。

家に着いたところには辺りも薄っすらと暗くなってきていて、ふと空を見上げると、一番星が、ついさつき灯ったばかりの電灯に負けないくらいに明るさで、今から訪れるであろう夜を照らすように輝いていた。

「毎日毎日、ご苦労様です」

「城谷さんの方が本当、ご苦労様ですよ。あんな坂、毎日のぼつてたら、本当に心臓、破裂しちゃいますよ」

古川さんは小さく笑ってから、「じゃあ、またあとで」と、にっこり微笑んで図書館の奥の方へと、大量に本を抱えていってしまっ

た。  
夏休みの終わりが近づくにつれ、ぼくと古川さんは次第に親しくなっていく、そしてゆっくりと、隣町にもとけ込んでいった。ぼくの夏の日課は、また新たにひとつ増え、図書館に通い、本を一冊読み、そして必ず彼女と言葉を交わす、この三つになった。

ついでに、以前渡された本にはさまっていた、古川さんのメールアドレスと電話番号が記されたメモ用紙を見つけた日から、彼女とのメールと電話も日課になり、そしてそれは、この暑い夏を過ぎても続きそうな日課だった。

うだるような暑さの中、ぼくは夏の終わりと恋のはじまりを予感するように、心臓破りの坂を、いつきに駆け上った。

……了

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n3207d/>

---

真夏の日課

2010年10月8日15時56分発行